

『イエスのエルサレム入城』

'21/06/27(会員総会)

聖書箇所:マルコの福音書 11章 1-11節(新約 p.88-)

はい、今回の礼拝では、イエス様の一行がエルサレムへ入城されるシーンを学んでいきます。…と言うことは、イエス様があの十字架にかかってくる瞬間まで、1週間を切ったというタイミングになったということです。今日のみことばは、「イエス様の一行が、そのエルサレムへ入られた」ということを教えてくれているのですが、その場合、「場所へ入る」という漢字表記を使うのではなく、週報や前の画面に表示されているように、「お城に入る」というような漢字表記を使います。

…と言いますのは、「イエス様がエルサレムへ入られる」というのは、私や皆さんが観光気分で、エルサレムへ行くのは全く状況が違っていて…、イエス様は、“王様として”エルサレムに入っていかれたからです。そういったことを、今から皆さんと一緒に確認していこうとしています。…残念ながら、今日は会員総会ということで、できる限り、この礼拝を短くしないといけませんのですが、時間の許す限り、聖書のみことばが教えてくれている真理を皆さんと一緒に分かち合っていきたいと思えます。

命題:イエス様のエルサレム入城で、何が分かったでしょう?

どうぞ、聖書をお持ちでしたら、今日のみことばであるマルコ伝 11章のみことばをお開きください。今日、私たちは、マルコ 11:1-11 のみことばから、あのイエス様のエルサレム入城という出来事で、一体何が分かるのか?ということをテーマに聖書のみことばを学んでいきたいと思えます。願わくは、今日、このメッセージを聴いてくださった皆さんが、今一度、イエス様の正体を知ることができて…、そして、何より、このイエス様を信じる信仰を持って、ますます、神様の前に正しく歩んでいくことを願います。

I・このお方は、不思議なお方である!(1-6節)

どうぞ、まずは、今日のみことばであるマルコ伝 11章の内、1-6節のみことばに注目していきましょう。このみことばは、このイエス様というお方が、非常に“不思議”なお方である!ということについて教えてくれています。今日のみことばの、1-6節には、このように記されています。

- さて、彼らがエルサレムの近くに来て、オリブ山のふもとへのベテパゲとベタニヤに近づいたとき、イエスはふたりの弟子をいに出して、
- 言われた。「向こうの村へ行きなさい。村に入るとすぐ、まだだれも乗ったことのない、ろばの子が、つないであるのに気がつくでしょう。それをほめて、引いて来なさい。
- もし、『なぜそんなことをするのか』と言う人があつたら、『主がお入用なのです。すぐに、またここに送り返されます』と言いなさい。」
- そこで、出かけて見ると、表通りにある家の戸口に、ろばの子が一匹つないであったので、それをほめた。
- すると、そこに立っていた何人かが言った。「ろばの子をほいたりして、どうするのですか。」
- 弟子たちが、イエスの言われたとおりを話すと、彼らは許してくれた。

●イエスが、2人の弟子たちをいに出した理由!

さて、このみことばが言わんとしている“表面的な内容”は、もう皆さん分かってくださったと思えます。今日は、時間の関係もあって、できるだけ、簡単に話を進めていかないといけません。…そこで、皆さん、どうぞ、考えてみてください。…一体どうして、この時、イエス様は、わざわざ、2人の弟子たちをいに出されたのでしょうか?…だって、いちいち、弟子たちをいに出さなくても、イエス様たちの一行が、

そこまで行けば済む話じゃありません?

確かに、この聖書のみことばが教えてくれているのは、イエス様こそ、真の神様であり、主権者です。…だから、当然、イエス様が、弟子たちのことをいに出しても、何ら問題はありせん。でも、イエス様は、少し前のマルコ伝 10章でも、『みなに仕える者になりなさい! 民のしもべになりなさい!』(マルコ 10:43-44)ということをお教え、そういったことを1番に実践して下さったお方じゃないですか? そうでしょ? …そんなイエス様が、むやみに、弟子たちのことをい出走りのように使うてしょうか?

私はそうは思いません。イエス様のなして下さることは常に、それ相応の“理由”があるのです。じゃあ、その理由とは何でしょう? ⇒恐らく、イエス様は、ここで、弟子たちをいに出すことで、ご自分の“力”と言うか、ご自分が何者であるか?ということ、ここで弟子たちに、もう一度、はっきりと認識させたかったのではないのでしょうか? …そうじゃありません? …と言うか、私には、それ以外の明確な理由が思い浮かびませんでした…。

● 予言の成就!

じゃあ、そういったことで何が分かるのか? …それは、このイエス様というお方が、すべてのことをご存知だ!ということ。…と言いますのも、実際、この時に、そのイエス様の言われた“予言”が成就しました。…ここで、無茶苦茶、些細なことですが、ここで、私が使っている漢字表記は、普通、聖書が使う「神の言葉を預かる」という意味の漢字ではなくて…、この聖書が使わない…、「ただ単に、先のことを言い当てる」という意味の、簡単な方の漢字表記を使わせてもらっています。

もちろん、皆さんは、聖書的な「預言」という漢字表記を使っても、あるいは、簡単な方の漢字表記を使っても…、どちらを使っても全く構いませんけれども、今日のメッセージでは、次のポイントで、難しい方の…、聖書的な「預言」という漢字表記を使いますので、それとの“区別”もあって、敢えて、ここでは聖書が使わないような「予言」という漢字表記を使わせてもらっています。

さて、少し話が反れてしまったので、話を元に戻しますと…、この時、イエス様のおっしゃられた通り、2人の弟子たちが指定された村へいくと、まだ誰も乗ったことがないロバの子が繋がれてありました。…ま、その程度なら、イエス様でなくても、適当に言った通りになるかも知れません。しかし、その後、弟子たちが、そのロバの子を連れて行こうとすると、そこに居た何人かが、『ろばの子をほいたりして、どうするのですか?』と言います。そこで、弟子たちがイエス様に言われた通り、『主がお入用なのです』と言うと、彼らはすんなりと、そのロバの子を貸してくれた、と言うのです。…これって凄くありません? …だって、まだ、誰も乗ったことが無い…、これからのロバですよ! もう老いたロバなら分からないでもないですが…(苦笑)。

しかも、イエス様が、「そう言いなさい」と教えてくださった、『主がお入用なのです』という言葉ですが…、これもまた、「イエス様というお方が、一体何者なのか?」ということに関わっています。…と言いますのは、ここでイエス様がおっしゃられた『主』という言葉は、皆さんも、よくご存知の「キュリオス」というギリシア語の言葉(κύριος)が使われています。確かに、この言葉は、奴隷から見た場合の「ご主人様」、あるいは、奥さんから見た場合の「夫」を指すこともあつたのですが…、新約聖書では、多くの場合、「真唯一の神様のこと」を指し…、それ故に、イエス様に対しても使われてあります。

もちろん、今日のみことばでも、「ご主人様、夫」という意味ではなく、真の神であられるイエス様という意味で使われてあります。そういう意味じゃないと、この段落と言うか、文脈は理解できませんでしょ? …このように、イエス様は、只者ではなくて…、特別なお方でありました。だから、イエス様は、そこに、誰も乗ったことがないロバの子が居ることをご存知であつたし…、どう言えば、彼らが、そのロバの子を貸してくれるかも知れずご存知であつたのです。…つまり、このみことばが言わんとしていることは、「このイエス様というお方は、不思議なお方…、つまり、神であられる!」ということなのです。

II・このお方は、約束の「メシヤ」である！（2-6 節）

どうぞ、今度は、今日のみことばの内、2-6 節の部分に注目していきたいと思えます。そのみことばから、このお方は、約束の「メシヤ」…、つまり、救い主である！ということを確認していきましょう。聖書のみことばは、先程と重なりますので、もう1度読むことはいたしません。

● イエス様の 主張 ！

今度は、ここ2-6 節の部分で、イエス様がこだわって？おられた、『ろばの子』ということに焦点を当てて、聖書のみことばを観察していきたいと思えます。…と言いますのも、皆さんも、不思議に思われませんか？…一体どうして、「馬じゃなくて、ロバの…、しかも、子どもなのだろう？」って…。実は、もちろん、そういったことにも、ちゃんとした意味と言うか、それなりの理由があるのです。そこで、今から、イエス様がなされた“主張”について、ご一緒に観察していきましょう。

皆さんは、馬やロバに乗られたことがあります？…実は、私はシナイ山に行った時にはラクダ…、また、アメリカでは、IBC の Fabian と一緒に馬に乗ったことがあります。が、“ろば”には乗ったことがありません。…なので、今日は参考までに、インターネットで、人間が馬に乗った場合の写真と、ロバに乗った写真との写真を探してきました。

いかがでしょう？…実は、馬とロバとでは、遺伝子的には97%も一致しているそうです。だから、馬とロバとでは、一見、見た感じがよく似ていますよね？…でも、その違いは？と言うと、やはり、1 番は、その大きさではないでしょうか？…多分、学術的には、いろいろと違いがある馬とロバですが、私たち素人が思い浮かべてしまうのは、まず、大きさです。

しかし、イエス様の“主張”は、あくまでも、馬ではなくて、ろばでした。そうでしょ？…もしも、これが私なら、「もしも、ろばが居なかったら、馬でも構わないよ！」となったでしょうけれども、イエス様は違いました。イエス様にとっては、「ろばでも、馬でも、どちらでも良い…」ではなくて、ろばじゃないといけなかったのです！…だから、今日のエピソードを、実は、4つの福音書すべてが書き記してくれているのですが、それら4つとも、それぞれ微妙に違った表現を使っているのですが、皆すべての福音書が、それは「ろばの子」であったと、はっきりと記してくれています。

それと、もう一つ…。馬は、その大きさだけじゃなく…、そのパワーや足の速さゆえに、戦に使われることが多かったようです。しかし、イエス様は、戦争を起こすために、人間となって、この地上に来られたわけはありません。イエス様は、そのお誕生の時、御使いたちが賛美して言ったように、「この地に、平和をもたらすためにやって来てくださった“平和の使者”なのです。」

● 預言 の成就 ！

じゃあ、今度は、その4つの福音書の内、マタイ伝 21 章のみことばを参照してみましょう。そこには、このように記されています。『1 それから、彼らはエルサレムに近づき、オリブ山のふもとへのベテパゲまで来た。そのとき、イエスは、弟子をふたり使いにし出して、2 言われた。「向こうの村へ行きなさい。そうするとすぐに、ろばがつながれていて、いっしょにろばの子がいるのに気がつくでしょう。それをほどいて、わたしのところに連れて来なさい。3 もしだれかが何か言ったら、『主がお入用なのです』と言いなさい。そうすれば、すぐに渡してくれます。」4 これは、預言者を通して言われた事が成就するために起こったのである。5 「シオンの娘に伝えなさい。『見よ。あなたの王があなたのところに来られる。柔和で、ろばの背に乗って、それも、荷物を運ぶろばの子に乗って。』』(マタイ 21:1-5)って…。

⇒皆さん、分かっただけですか？ここ4 節のみことばに何とありました？これは、『これは、預言者を通して言われた事が成就するために起こった…』というわけです！…というわけで、実は、この時に、イエス様が、ろばに乗って、エルサレムに入城される！というようなことが、旧約聖書に預言されてあったのです。もちろん、こういった場合は、先程の簡単な漢字表記の「予言」ではなくて、難しい方の…、「神からの言葉を預かる」と書く方の「預言」という言葉を使うべきです。

実は、創世記 49 章に、族長ヤコブが、その子どもたちに、世の終わりについて語るシーンで、このようなみことばがあります。『10 王権はユダを離れず、統治者の杖はその足の間を離れることはない。ついにはシロが来て、国々の民は彼に従う。11 彼はそのろばをぶどうの木につなぎ、その雌ろばの子を、良いぶどうの木につなぐ。彼はその着物を、ぶどう酒で洗い、その衣をぶどうの血で洗う。』(創世記 49:10-11)って…。

⇒つまり、神の国の支配者が、12 人の子どもたちの内、ユダから出てくるということです。そして、『ついにシロが来て…』とある、このシロとは、約束のメシヤ…、つまり、イエス・キリストのことです。そして、どうぞ、11 節をご覧ください。ここで『雌ろば』という言葉が出てきます。

実は、ゼカリヤ書 9:9 には、その『雌ろば』に関して、次のような預言がなされています。『シオンの娘よ。大いに喜び。エルサレムの娘よ。喜び叫べ。見よ。あなたの王があなたのところに来られる。この方は正しい方で、救いを賜り、柔和で、ろばに乗られる。それも、雌ろばの子の子ろばに。』って…。⇒実は、先程見たマタイ 21 章のみことばは、ここゼカリヤ書 9:9 の預言を引用したもののなのです。…どうして、マタイ伝なのか？…それは、マタイ伝の読者たちは、まず、ユダヤ人たちを想定しているからです。

つまり、このイエス様こそが、あの族長ヤコブが、その子どもたちに語った…、約束の救い主であられる！ということです。…族長ヤコブとは、このイエス様の時代からすると、約 2000 年前とは言いませんが、千何百年も前の、遥か大昔から預言されていた約束の救い主…、約束のメシヤであったのです！

III・このお方は、当時の民衆に「歓迎」された！（7-11 節）

それでは、最後駆け足で、今日のみことばの7-11 節で、このお方…、つまり、イエス様が、当時の民衆たちに、「歓迎」された！ということについて、ご一緒に確認していきましょう。どうぞ、今日のみことばの最後、7-11 節をご覧ください。そこには、こう記されています。

- 7 そこで、ろばの子をイエスのところへ引いて行って、自分たちの上着をその上に掛けた。イエスはそれに乗られた。
- 8 すると、多くの人が、自分たちの上着を道に敷き、またほかの人々は、木の葉を枝ごと野原から切って来て、道に敷いた。
- 9 そして、前を行く者も、あとに従う者も、叫んでいた。「ホサナ。祝福あれ。主の御名によって来られる方に。」
- 10 祝福あれ。いま来た、われらの父ダビデの国に。ホサナ。いと高き所に。」
- 11 こうして、イエスはエルサレムに着き、宮に入られた。そして、すべてを見て回った後、時間ももうおそかったので、十二弟子といっしょにベタニヤに出て行かれた。

● 民衆が取った 行動 ！

さあ、ここでは、この当時、イエス様がエルサレムに入城されるに当たって、当時の民衆が、どのような“行動”を取ったかが記されています。このみことばが教えてくれていることは、大きく分けて、3つありま

す。それらは、簡単に言うと、①民衆たちが、自分たちの上着を敷いた。②ある者たちは、木(き)の葉を枝ごと野原から切って、道に敷いた。③大勢の者たちが、『ホサナ！』ということをやった、ということだ。

実は、この時に、民衆たちがした、自分たちの上着を道に敷くという行為は、民衆たちの喜びや歓迎を意味しています。例えば、Ⅱ列王記 9 章(43 節)には、「当時の民衆が、彼らの着ていた上着を下に敷いて、新しく北王国の王となったエフーのことを歓迎した」というようなことが記されています。

また、ある者たちが、木の葉を枝ごと野原から切って、道に敷いたということですが、これは、並行箇所であるヨハネ伝 12 章を見ても、『しゅろの木(き)の枝』であったということが分かります。これは、「なつめやし」の別名でもあります。実は、これは聖書ではないのですが、その外典のⅠマカバイ記 13 章(54 節)などを見ても、「1 度、異邦人たちに奪われてしまったエルサレムを奪還できたことを喜んだ民衆たちが、しゅろの枝をかざして喜んでいる」シーンが描かれています。

そして、3 つ目の、群衆が叫んだ『ホサナ』という言葉ですが、これは、元々の意味は、詩篇 118:25 にあるように、『ああ、【主】よ。どうぞ救ってください！』という意味なのですが…、この言葉は、次第に、本来の意味が失われて、ただ単に、賛美の時の感嘆詞のように使われるようになっていって、あまり深い意味を表わさなくなっていったのだそうです¹。

しかし、まあ、明らかなのは、この当時、多くの民衆たちは、こぞって、イエス様のことを大歓迎した！ということだ。当時、有名であったイエス様のことを…、しかも、そのイエス様がエルサレムに来られたということで、当時の民衆たちは大喜びで、迎え入れたわけだ。

●民衆たちの誤解！

どうぞ、今日のみことばの 9-10 節に記されている…、群衆たちが叫んだ内容に注目してみてください。そこには、こう記されています。『9 …ホサナ。祝福あれ。主の御名によって来られる方に。10 祝福あれ。いま来た、われらの父ダビデの国に。ホサナ。いと高き所に。』って…。正直、私も、ここのみことばを見て、そう大きな問題は感じません。

しかし、実は、今日のみことばの平行箇所であるヨハネ 12 章には、当時の弟子たちによる貴重なコメントが記されています。そこには、こうあるのです。『初め、弟子たちにはこれらのことがわからなかった。しかし、イエスが栄光を受けられてから、これらのことがイエスについて書かれたことであって、人々がそのおりにイエスに対して行ったことを、彼らは思い出した。』(ヨハネ 12:16) って…。

⇒皆さん、分かっていただけますか？…実は、ここで、「弟子たちが思い出した…」と記されているように、あの 12 人の弟子たちでさえ、この時には、よく分かっていなかったのです！…イエス様が、一体何のために、この世に来てくださって、何のために、ここエルサレムに来られたのか？という本当の目的について…。

…と言いますのは、これまで何度も言ってきたように、当時、大勢の者たちは、イエス様のことを、政治的なメシア…、イスラエルを、あのローマ帝国の圧政から救ってくれる政治的な指導者のように勘違いをしていたからです。しかし、実際のイエス様は、このエルサレム入城の出来事から 1 週間もしない内に、一見、そのローマ帝国の兵隊たちに捕らえられて…、みじめに、十字架刑に処されて、亡くなっていかれたのです。…その少し前の裁判の時、大勢の民衆たちが、祭司長たちに扇動されて、イエス様のことを「十字架に付けろ！(代わりに)バラバを釈放しろ！」と叫んだのです…。

もちろん、この時の群衆と、エルサレム入城の時、イエス様を歓迎した者たちが皆、全く同じ民衆たちだったとは言いません。しかし、多くの者たちは、イエス様の正体を、本当の意味では知らなかったし…、イエス様のことを堅く信じるような信仰者でもなかったであろうことは間違いありません。それゆえに、彼らのイエス様に対する態度が大きく変わったような者たちは、少なからず、居たのではないのでしょうか？

<励ましの言葉>

しかし、今日、このメッセージを聴いてくださっている皆さんは、ご存知のはずですが、イエス様が、一体何者で…、何のために、エルサレムへ入城されて…、何のために、あの十字架に磔にされたのかを…。そうでしょ！

少し前…、マルコ伝 8 章でも、9 章でも、また、10 章でも、イエス様は、少なくとも 3 度に渡って、「ご自分が、これからエルサレムに行って、そこで、異邦人たちの手に渡されて、死刑に定められて、死ななければならない！」ということをお預言しておられました。…イエス様は、すべてご存知であったのです！…にも関わらず、イエス様は、躊躇することなく、エルサレムまで来てくださいました…。

そんなイエス様の献身的なお働きと言うか、あの十字架上での犠牲と、約束通り、3 日目にのみがえってくださった奇蹟があったから、私たちに、ようやく、救いの道が備えられたのです！…そうでしょ！このイエス様こそ、私たちに与えられた唯一の救い主です。だから、このお方を信じる以外の…、その他のどんな道を選んでも…、どんな厳しい修行に耐えても、どれほど大きな功績を残しても、この地上のどの神様やどの宗教を信じても、そこに救いはありません。

どうか、まだ、イエス様のことを信じないで…、せっかく、神様が素晴らしい恵みを与えようとしてくださっているのに、その救いの手を拒んでいる皆さん…。どうか、いつまでも、救いの手を拒み続けるのではなくて、願わくは、1 日も早く、このイエス様のことを、真の神、あなたの救い主として、信じ受け入れていただきたいと思います。最後に、お祈りをもって、今日のメッセージを終わらせていただきます。

¹ 「新聖書注解」の『ホサナ』の項目から…